

江戸時代末期には癲狂科が独立する寸前までいっ
ており、それがすすめば、治療中心の個人医学で、
法医学とは直接の関係をもたない精神病学が成立

していたであろう。

(平成27年1月例会)

緒方春朔にみる人痘法の実際

西巻 明彦

エドワード・ジェンナーが牛痘種痘法を開発し
てから(1796)、モーニック(1849)による日本
での牛痘種痘法が成功するまでの時間差と、それ
以後の急速な牛痘種痘法の普及についての事象
は、一般的な問題として取り上げられることは多
い。しかし18世紀末の日本において池田瑞仙に
よる痘瘡治療、橋本伯寿の流行病の隔離につい
ての『断毒論』、緒方春朔による人痘種痘法を書
いた『種痘必順弁』と、天然痘に対する対処法は充
分に揃っていた。当時の医療担当者にとって医療
効果の高いものは、蘭法、漢方を問わず実証的
に取り入れる傾向は強かったと考える。事実、1770
年に出版された『温疫論』は治療に対する概念を
急速に普及させた。日本における19世紀中頃の
尊王攘夷運動などによる思弁的傾向の強かった時
の漢蘭対立と、18世紀は異なる状況下ではなかつ
たかと演者は考える。

緒方春朔は、1790年2月に天野甚左衛門の2児
に鼻早苗法による人痘種痘法を行い成功した。こ
の事蹟は、やや時代が下がるが華岡青洲の全身麻
酔法の成功に対し、一般的に知られていないのは
残念である。春朔は医者向けに寛政8年『種痘証
治録』を著している。その内容は、叙を佐井聞庵
(天保9年)題言を春朔、撰苗、蓄苗、天時、擇日、
調摂、禁忌、可種、不可種、要旨、自製曲管之図、
補種、信苗、治法の順番に記載され、『医宗金鑑』
に準じている。唯一異なる点は、自製曲管之図で、
図と自らの概念を述べている。鼻乾苗法をなぜ採
用したかについて、アン・ジャネッタ氏は、「緒
方春朔はオランダ医師ベルンハルト・ケルレルに

知遇を得ていたにもかかわらず、彼が西洋式人痘
種痘法を実践あるいは推進しようとした形跡はな
い。これは九州のような高温多湿の気候の土地で
は中国式人痘種痘の方が有効なことが明白であ
ったためかもしれない。」と記している。緒方春朔
研究は、富田英壽氏による詳細な論考があり、そ
の中で『医宗金鑑』を中心に改良し、独自の種痘
法を開発したと述べている。その延長上で考える
と春朔は『医宗金鑑』を中心に種痘を考え、ケル
レルがランセットを用いた種痘は善感しづらいと
述べた点をふまえ、実証的に鼻早苗法を最善とし
た点にあると考える。

治方について春朔の概念は、天然痘を善感させ
ることに主眼点があり、そのためどうしても種痘
が強いものになってしまうのはやむをえない。そ
のため、痘苗を陽毒とし、下苗を陽の強い時期に
設定し、適応症から虚証の人間をはずし、中国伝
統医学の概念に沿って当時の最善の策をとったこ
とは評価すべき点である。善感させ順痘にもって
いく以上、治方は重要なものであり、種痘と治痘
は表裏一体と考えるべきである。治方は軟膏であ
る二聖散、信苗発見部位併治方(2)、発熱之際証
治(4)、見点之際証治(4)、起膿之際証治(3)、
灌漿之際証治(1)、収靨之際証治(4)、結痂落痂
之際証治(2)、痘中交雜証治(4)で、医宗金鑑に
準拠し、一部他の薬方を加味している。その他、
禁忌に避穢香法がのせられている。出典は、外科
正宗1、瘍科鎖言1、陳氏痘疹方論1、活幼心法6、
医宗金鑑6、博愛心鑑1、痘疹心法要訣1、保赤2、
痘疹玄機2、本草綱目1である。避穢香法は、医

宗金鑑に記述されており、出典をみると春朔は広く痘瘡関係の書物を読破していることがわかる。治方に重要性があることは、その後の牛痘種痘法と異なる点と考える。また治方について、その重要性から2代目緒方春朔は天保9年京の平安痘科佐井聞庵に入門している。

池田痘科は、初代池田瑞仙は『痘疹戒草』で、池田霧溪は『種痘弁義』(1858)で種痘法を否定している。しかし佐井聞庵は池田瑞仙に習い、京で平安痘科を任じている池田学派に属しているにもかかわらず春朔の『種痘證治録』に序を記している。さらに子息である長吉は2代目春朔から種痘術をさずけられ、春朔の門人帖に天保9年4月8日入門平安痘疹科佐井有吉有則の記載がみられる。佐井家の門人帖にも2代目春朔の記載がみられ、さらに佐井聞庵の序文から少なくとも種痘を

否定していないことがわかる。門人帖に京の医師は11人を数え、中には牛痘種痘法に尽力した岡山玄中がいる。

一般に蘭学は種痘を肯定し、漢方は否定していると言われるが、これは池田霧溪が人痘、牛痘とも種痘を否定したことも一因と演者は考えるが、実際には同じ池田学派でも江戸は否定、京は肯定していたことがわかる。佐井家は聞庵の父親圭斎は解剖学の知識が豊富であると小石元俊から激賞されているので、新進の家風があったと考える。蘭学ではこの当時橋本伯寿は反対で、司馬江漢は賛成しているので、実態は複雑である。

春朔の種痘法は医宗金鑑を主体としながらも独自に改良し、普及した点は日本医学の独自化として評価されると演者は考える。

(平成27年1月例会)

書 評

泉 孝英 編

『日本近現代医学人名事典』

本書は、日本近現代医学史研究の必備書であるとともに、2000年代に発刊された医史学関連書籍の中でも白眉の作といえる。本書が2014年度矢数医史学賞を受賞したことからもそのことは明らかである。人名事典などのいわゆる工具書は、その利便性に比して業績としての評価は必ずしも正当に評価されないことも少なくない。もちろん、国語学や漢文学では「諸橋大漢和辞典」や「広辞苑」のようにそれ自体が高い評価を得ていることもあるが、他分野、特に自然科学系ではこうした事典類の編集は、労力の多さや研究への貢献度に比して、新発見の提出を至上命題とする学的人格も影響し、高評価を得にくい場合が多い。

しかしながら、本書の存在は、いわゆる工具書の概念を大きく越えて、学問的業績としても、新発見の提案に勝れども劣らぬ価値を示している。

その理由は、一つには収載されている人名の範囲が、医史学的にみて何らかの事績を残しているという意味での医史学上の人物のみならず、基礎医学、臨床医学、社会医学、さらには看護学や医療に隣接している社会福祉・社会事業、文化・文芸・芸術にいたるまで、およそ医学といくぶんかでも関連のある領域・分野の人名の生没年から履歴事項、事績、場合によりその社会的評価に及ぶ記載を可能な限り行っている点で、類書を圧している。収載期間1868年(慶應4年・明治元年)3月から2011年(平成23年)12月31日までで、その総数3762名の医学関連人物を所載していること、そしてそれが個人的作業であるという点で、まさに偉業という他はない功績である。そして、二つにはその記載内容がきわめて公平・公正で予断を排した客観的記載に努めている点である。こ